

美しく生きる

保内中学校
校長室だより第 11 号
平成 30 年 7 月 20 日
文責 鎌田 宏和

痛みを知り、為すべき事を考える夏に ～終業式から（抜粋）～

豪雨災害から 2 週間が過ぎ、保内中学校では、1 学期を終え、いつものように夏休みを迎えようとしています。近隣の大洲市や西予市、あるいは宇和島市の吉田町や三間町では、学校や一般家屋の復旧がままならず、混乱のまま 1 学期を終え、依然として日常を取り戻せないでいる方々がまだまだ多くいらっしゃいます。今年の夏休みは、こうした方々の不自由さや苦勞に思いを寄せ、どう生きるべきか、何ができるかをしっかり考える夏休みにしてほしいと思います。

災害発生後の新聞記事（一面トップ）の見出しを読み返してみると、災害の深刻さや復興の道のりの険しさを改めて知ることができます。

- 7 月 10 日（火）「県内死者 25 人に」
 - 豪雨災害、不明 1 名捜索続く
 - 大洲浸水 4600 世帯 肱川氾濫平成以降最大
- 7 月 11 日（水）「県内豪雨 死者 26 人に」
 - 不明 2 人 断水 2 万 2415 世帯
 - 鹿野川ダム放流量 基準の 6 倍
- 7 月 12 日（木）「続く断水 2 万 1610 世帯」
 - 県内豪雨災害 依然 2 人安否不明
 - 野村鹿野川ダム 適切操作を強調
- 7 月 13 日（金）「日常いつ戻る」
 - 交通網復旧長期悪化か
 - 避難所の朝 前向く住民
- 7 月 14 日（土）「猛暑 断水解消遠く」
 - 西日本豪雨「特定非常災害」指定へ
 - 首相、放流「徹底検証」
- 7 月 15 日（日）「広がる奉仕の輪」
 - 猛暑 1900 人超被災地入り
 - 被災 3 県で今年最高気温 熱中症 132 人搬送
- 7 月 16 日（月）「猛暑の大洲 水復旧」
 - 熱中症搬送 全国 2061 人
 - 「どうにか踏ん張る」宇和島・吉田の避難所耐乏生活
- 7 月 17 日（火）「交通網回復へ前進」
 - ミカン畑 根こそぎ
 - 西日本豪雨 災害ゴミ 初動遅れ
- 7 月 18 日（水）「日常生活一歩ずつ」
 - 県内豪雨災害 孤立集落すべて解消
 - 野村・鹿野川両ダム検証 大洲であす初会合
- 7 月 19 日（木）「県内豪雨災害 4 人犠牲大洲市避難指示基準 ダム放流量含まず」
 - 異常把握 水位より先
 - 大洲・上島で断水解消
- 7 月 20 日（金）「県内豪雨災害 2 週間 農林水産被害 273 億円 平成最多の可能性」
 - 住宅被害 3 万 8000 棟超
 - ダム放流伝達検証を

（「愛媛新聞」より引用）

校区にも、巨大な流木が橋の欄干に引っかかったままになっていたり、赤土がむき出しになった山の地肌がいたるところに見られたり、道路に打ち上げられた泥が乾いて堆積していたり、決壊した堤防の岩の塊が崩れたままになっていたり、災害の爪痕がそこそこに見られ、まだまだ落ち着いた生活が取り戻せていない地域や、災害に遭い不安や苦しみを抱えている方々がいらっしゃいます。夏休み中、様々な経験を通して、次の 3 つのことを心掛け、実践してほしいと思います。

- 1 人の痛みを知ること
- 2 人のために行動すること
- 3 人とよくかかわること



視野を広げ、更に成長した皆さんに会える新学期を楽しみにしています。

「買えなかった切符」

夏休みを迎え、お盆の帰省の時期になると思い出す一人のおばあさんがいます。そのおばあさんを思い出すと、とても胸が苦しくなります。今からもう30年も昔のことになってしまいました。地方の鉄道駅に「自動券売機」が設置され、駅の無人化が検討され始めた頃のことです。当時大学生だった私は、JRを乗り継いで帰省で実家のある大洲に向かっていました。10時間ほどの汽車旅を終え、やっと夜の大洲駅に降り立ち、改札口を通り抜け駅舎から出ようとしたとき、突然聞こえてきたおばあさんの声に足が止まりました。

「*五郎まで、やんなはいや。」

「五郎まで、鈍行一枚やんなはいや。」

声のする方を見ると、おばあさんが壁（正確には自動券売機）に向かって、切符を買おうとしているのです。



「五郎、一枚くださいや。」

おばあさんは、自動券売機で切符を買う方法が分からず、切符を求めて一生懸命機械に話し掛けていました。すぐに近寄って、そのおばあさんの代わりに機械を操作し、切符を買ってあげればよかったのですが、その時の私は、立ちすくむだけで手助けすることも言葉を掛けることすらできませんでした。いつまでたっても駅員は出て来ず、おばあさんは困り果てている様子でしたが、私は、やがて迎えに来た家人の車に向かって歩き出し、おばあさんを見捨てるように駅舎を出たのでした。なんとも恥ずかしい話です。今でも自動販売機を見ると、あのおばあさんの後ろ姿を鮮明に思い出すのです。言い訳にならない言い訳をさてもらえれば、人と会話をしなくても物が買えたり乗り物が利用できたりする人間関係の中で生活するうちに、自分に嫌な癖が身に付いてしまっていたのかもしれない。

あれから30年、私たちの暮らしはどんどん便利になり、豊かさの中で楽しいことを追いかけるように生きています。そんな恵まれた生活をしている一方で、人間として大切な何かを失っているのではないかと感じることもあります。

ある日曜の朝のファーストフードのお店で、母親が2人の小さい子どもとテーブルを挟んで座り、母親は携帯電話をいじりながらハンバーガーをかじっています。子どもは、お母さんをのぞき込むように見上げながら、シェイクを寂しげに飲んでいきます。

また、コンビニの前では、4～5名の中・高生が縁石に横並びに座り会話をしています。しかし、彼らはお互いに顔を見合わせることもなく、指で画面を操作しながら延々と会話しているのです。

大洲駅のおばあさんは、今、この時代をどう見ているのでしょうか。当時の年齢からすると、この社会を見ることなく、すでに亡くなられているのかもしれない。しかし、もしも、今生きていらっしゃるなら、私はあの時のお詫びをして、今度こそ一緒に切符を買ってあげたいと思うのです。

* 五郎（駅）：大洲駅の次の小さな駅

56個のランドセルを寄贈いただきました ご協力ありがとうございました。

先号で、被災した地域の小学生にランドセルを送ることについてお声を掛けさせていただいたところ、多くの方々から貴重なランドセルを寄贈していただきました。

ところが、近隣の市町に連絡すると、ランドセルは既に足りており十分とのことでしたので、活用について話し合った結果、JICAを通じて外国（アフガニスタン等）に寄付させていただくことにしました。いただいた貴重なランドセルを、外国の子どもたちのために役立てたいと思います。皆様のご厚意に心から感謝申し上げます。